
空の器で生きる絶望 からの うつわで いきる ぜつぼう

深海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の器で生きる絶望 からの うつわで いれる ゼっぽつ

【Zコード】

Z6004M

【作者名】

深海

【あらすじ】

“現のち夢ときどき架空”の続編。片桐紗柚、32歳独身。後悔したくないと思いながらも、自分の人生を生きられない弱さを抱えながらも、生きていくために足搔いて苦しんでいる紗柚。そんな彼女は自分の人生を周囲の人間を傷つけて生きていく術しか持ち合わせていなかつた。

紗柚の視点のみで描かれる独白小説。

序章（前書き）

“現のち夢とおじき架空”はあれで、完成していたけれど、なんとなく続編を書いてみました。はつきり言って、この続編を読むのはお勧めしません。前作はああいつ終わり方だけれど、綺麗に終わってますから。続きを読みたいという方だけ、読んで下さい。

序章

今まで、私が愛した男性が、私を愛してくれた人はいない。

ただ、一度だけでいい。

愛した人に愛されてみたい。

愛される幸せを享受したい。

愛され愛し、慈しみ、相手の幸せが自分の幸せに繋がるような関係。

絆を結び、契りを交わし、ただ……。

永遠に続く愛なんて望まない。

一瞬でいい。

ひたむきに、純粹に、お互いに愛し合つ……連理の枝。

きっと、私には絡み合つ枝など無いのだ。

ただひたすら待つて、ただ一人、朽ちて枯れ果っていくだろう。

恋が終わった翌日に、インターネットで調べたのは『傷を消す薬』。

自分で何かをはつきり意識しての行為ではなかった。

ただ、調べているうちにあるページに辿り着いた。それは、リストカットの痕を消す方法に対する書き込みのページ。

リストカットの痕は自分への戒めとして消すことは全く考えていなかつた。もう一度リストカットをしないことへの決意として一生この傷を背負つて生きていく覚悟でいた私にとつては、刺激的なページだつた。

自分の傷痕なんて、あまり目立たないものだが、よく見ればその他の傷痕だとはつきりわかるものだつた。

見せびらかすものではなかつたから、左手首を見られないように生活するのは日常的なごく当たり前の仕草。友達にも話していないし、恋人なんていたことがないから、誰にも話したことが無い。もちろん、家族にも話していない。ただ、もしかしたら同じ家で暮らしているから家族は何か知つていてるかもしれない。けれど、一度も私の傷痕に触れるような会話はしたことが無い。

傷痕の痛みや赤みが消えてからは、見られないように気をつけることはあつたが、その傷痕をどうこうしようと考えたことも無かつた。傷痕が重荷に感じるようになつたのは、見合をするようになつてからだ。

見合の相手にいつ話すべきなのか、いつも悩んでしまう。付き合い始める前に言つておくべきことだとは思うが、家族にすら話せないことを、会つたばかりの他人に言い出せるわけがない。だったらと、付き合つしていくうちに親密になつてきたらと思っているが、親密になる前に別れてしまつ。前回の失敗があるから、セックスする

前にはきちんと話そうと心に決めている。

でも、傷痕を消してしまえばと考えるようになった。無かつたことに出来るなら、自分の過去を話さなくともいいのではないかと姑息なことを考えた。

それから、形成外科がある病院を探し、何処の病院に通つかを選んだ。でも、あと一步が踏み出せなくて電話をかけるのに一週間悩んだ。

決心がつき電話をかけて、傷痕を治す治療をしているかと尋ねると、大丈夫だと答えられた。その勢いで、翌日に病院の予約をしてしまった。翌日でもなれば、あれこれ悩んでしまいそうで嫌だったのだ。

行くしかない状況に自分を追い込んだ。

診察の待ち時間は不安でたまらなかつた。

電話口で予約をする際にリストカットの傷痕を治したいことを告げていた。第三者に告げたのは初めてだつた。それはお互い相手の顔が見えない状況での告白。

今度はそれを、対面した医師に言わなければいけないのだと思うと逃げ出したくなつた。相手が、ただの傷痕を治す医師だから大丈夫だと自分に言い聞かせたて、踏みとどまることが出来た。精神科医に会つて、どうしてこんなことをしたのかとか傷痕について根掘り葉掘り聞かれることは無い。ただ、そこに傷があり、それを治す治療をしてくれるだけだと、ただ呪文のように繰り返した。

診察室に通されてもしばらく待たされた。

壁にあつた賞状や免許や許可証の類で、医師が自分の父親くらいの年齢だと推測できた。しかも、男性の医師。それらが、幾分安心に繋がつた。

自分より若い医師、同年代の医師、同じ性別。はつきりとは説明できなけれど傷を見せることに抵抗があつた。

実際、助手らしき女性スタッフに見せることには自分で抵抗が大きかつたのだ。

診察では、傷痕を見せて、何年前の傷かを告げた。

最初に告げられたのは、

「傷痕を完全に綺麗に消すことは出来ない。ごまかす程度にしか出来ない。」

そのことは例のインターネットの書き込みで読んで、わかつていた。でも、自分の傷はそんなに目立たないし、たいした傷じやない。これくらいなら、治るとどこかで楽観視していた。

だから、ショックだった。その時、頭に浮かんだのは代償の一文字だった。

それから、医師は治療に関して話し出した。

「1ヶ月に1回通つて、10回のレーザー治療が必要。レーザー

治療1回は一万円かかり、保険適用外。」

そこで、決断を迫られた。誰かに相談できるわけじゃない。私が決めなければいけないのだと……。

自分の人生、あまり決断に迫られるようなことは32年生きてきてほとんどない。誰かに委ねてしまつことで責任から逃れていたのだ。

「治療します。」

きつぱりとした口調ではなく、どこか弱弱しいものだった。それでも、自分の意志はそこにあった。

待合室に戻り、肩の荷が降りた気がした。会計すれば帰れると思っていたが、再び診察室に通され、早速1回目の治療が始まった。何の心の準備も無いままだつたけれど、そんな私が考えていたのは能天気にきちんと傷痕の写真撮つとけば良かつたということだった。いちおう、携帯のカメラで撮影はしておいたけれど。

治療は痛みが伴うものだつたけれど、耐えられない痛みでもなく数分で終わつた。

病院を出て歩き出すと、だんだん手首が痛くなつてきた。それは懐かしい痛みだった。

リストカットした後は、その左手で重い物を持つとぴりぴりとした痛みが走る。傷が存在を主張しているようで、当時はそれが少し快感だつたことを思い出した。

リストカットをしたのはもう10年以上前でそんなことはすつか

り忘れていた。

懐かしくて、泣きたくなつて、赤く腫れ上がつた手首を見ていいろ
いろ考えさせられた。

10ヶ月、半年以上通院して、10万円以上かかる治療をして、
傷痕の無い手首を取り戻せるわけじゃない。何か意味があるのだろうか。

この治療で私が得られるものは何だろう。

得られるものは傷痕を誤魔化した手首だけでは無い様な気がする。
自分の中でもかが変わるような気がするのだ。

第3章

今付き合っているお見合相手の名前は、遠藤春朋。

その彼とは今日で2回目のデートになる。治療から1週間。

彼との共通の話題は、何も無い。会話が無くなつて沈黙することが度々あり、それを気まずく感じているのは私だけなのか、彼はただ黙っている。彼がつまらない人間なのか、それとも私が面白みがない人間なのか、ただ合わないだけなのか……。

車に乗っている間は、テレビの放送が流れていて、会話をしなくて楽になつたが、気を使いすぎてか、途中から頭痛が始まつた。

人生初めてのお見合相手は葉山敏行だつた。

3時間くらいドライブして帰宅した。その途中から頭痛が酷く、帰つてすぐに動けなくなつたことを良く覚えている。

葉山さんとの最初のデートは、また途中から頭痛が始まつて家に帰りたくなつた。

この頭痛の原因がわからず、彼との相性が悪いのかとも思つたけれど、彼との会話は歴代のお見合相手の中で最も楽しいものだつた。時事ネタに精通しており、会話のテンポもよく、自分より広い視野を持つている人で大人の包容力があつた。私の我儘にも付き合つてくれそうだったし、肩の力が抜けていたのは彼くらいだったかもしれない。

今思えば葉山さんと結婚していれば幸せになれたのだ。

だけど、あの頃の私は、真剣に結婚する気など無かつたのだ。親に言わされて嫌々見合をして、彼が断つてくれるだろうと何も深く考えずに付き合つていた。

けれど、彼の親が挨拶に来ると言ひ出しているのを知つて、恐怖を感じた。

お見合が何なのかなを意識して、結婚というものが一気に現実味を

帯びて自分の身に迫つてくるのを感じて怖氣づいて逃げ出した。

それに、彼には自分はふさわしく無い人間だと、自分の醜悪さを彼と付き合つて自覚した。

自分は綺麗な人間じゃないのだ。

そうして、最初のお見合は見事に破談になった。

それから、お見合相手と会う度に頭痛を感じて、相手がどうのこうのではなく自分側の問題だと認識した。

推測では有るが、頭痛の原因は緊張だ。ただ、自分は緊張している状態をいつからか自覚できなくなつた。学生時代には緊張するという感覚はよくあつたが、最近ではそれがわからない。けれど、ずっと体は緊張しているようで、信頼関係を築けていない相手との付き合いは常に緊張し続けている状態で、それが体に頭痛として現れているようだつた。

頭痛は心を萎縮させる。

それだけではない。遠藤さんには正直に本音を話せないのだ。嘘は言わないように心がけてはいるが、何がしたいとか、あれがいいとか、そんなことすら言えないのだ。

自分を曝け出せないのは、付き合い初めでは良くあることだが、それとは違う気がするのだ。はつきりとした予感。彼とは上手くいかない気がする。

彼は、はつきりと自分の意見を主張しない。曖昧に言って、どこか相手に意見を汲み取つて欲しいと期待している。私はそれがわかつていて敢えて触れない。それが私の望むことではないし、はつきり言わない彼に気をつかうなんて嫌なのだ。そこは譲れない。

自分は人を思いやる気持ちが他の人より薄いかもしれない。

遠藤さんとの付き合いは、彼が忙しいこともあり2週間に一度会う程度で、お互いにメールや電話のやり取りも頻繁に行つていない。ただ、彼とは他のお見合相手と違つて、話すときは電話じゃなくてお互いに向かい合つて話したいといつ思いがあつた。恋愛感情は全く無いけれど、会いたいと感じた。

お見合して、そろそろ3ヶ月を目前にして、きちんと話し合つことにした。ここで終わるかもしれないと思いつつ、自分の本音はしつかり話した。彼も私に特別な感情は抱いておらず、かといって、別れるという方向にはならなかつた。

ただ、彼は私のことを真剣に考えて貰っていることは感じられたので、私の過去を話すこととした。

この日に会う約束を交わした数日前から、リストカットのことを話さなければいけないかもしないという覚悟は決めていた。実際、話すことにして、言葉が出てこなかつた。誰にも話したことが無い傷について打ち明けるのは簡単ではなかつた。

彼は私に話すより急かしたりはしなかつたし、今じゃなくともいいとも言つてくれた。

そんな彼を見て、安心したわけではないけれど、口を開いた。

私の話を聞いてくれて、実際、彼がどう感じたのかはわからない。口では何とでも言えるからだ。

お互いに結婚のことを考へるところでした。

第5章

そんな矢先、私の体が変調をきたした。

病院へ行くと詳しく検査をしてみないとわからないと言われ、1週間に検査することになった。

彼との結婚をどう考えればいいのかわからなくなつた。

何か問題があれば、絶対に結婚はしないだろう。

では、何も無ければ、結婚に踏み切るのか？

自分自身にそう尋ねてみると、結局答えは出せなかつた。

検査の結果、悪い病気でも見つかれば……助からない命なら。

もし、自分が余命数年で残り少ない人生だとしたら、どういう人生を送るか想像したことは何度がある。

仕事は辞めて、好きなものを買って、読みたい小説を思い切り読んで、中国へは一人旅というやつを行く。

まあ、一言で言えば遊んで暮らすというやつをしたい。

でも、自分が実際そういうことになつたら、自分ならどうするだろうと考えると、自分の理想とは違うことになる気がする。

きっと、仕事は体の自由が利くまで働くだろう。派手にお金は使わないけれど、今まで欲しいと我慢してきたものは買う。でも、買わない氣もする。小説はがんがん読むだろうし、中国語の勉強はやめてしまうだろう。中国への旅行はわからないな。

ただ、友人と過ごす時間を大切にする。

遺書を書きたいとか……あと、きっと余命数年ということは家族にも友人にもきりぎりまで言わないだろうな。会いたい人もいるし、謝りたい人もいる。

と、いろいろ想像してみたことはある。

今の状況では、まず結婚はしないで独身でいたい。遠藤さんとは

円満に別れよう。仕事は続けて、小説でも買いに行こうとか。

残念ながら、検査の結果はいたつて自分が健康体だということが証明されただけだった。

結局、結婚をどうするか考えるのを放置していただけれど、その問題と再び向かい合わなければならなくなつた。

自分の人生、後悔だけはしないでいようと思つていた。その為に、いろいろな決断をしてきたけれど、振り返つてみると後悔だらけの人生だった。

諦めてきたことが多い。でも、その時その時に自分に納得させてから決断を下していた。自分の一部を殺して妥協することを選んだ。私の人生は、それだけで構成されている。すごく惨め。哀れ。

でも、他人の所為にはしたくない。

だから、まだ彼との結婚を決断できない。いや、自分の中では既に答えは出ている。愛していないどころか、人としても好きにはなれていないのだ。ここが好きと感じられる部分が一つも無いから、結婚に踏み切れないのだ。

それでも、わかっている。自分は彼と結婚することになるだろうと……。

私に残されている選択肢は無かつた。
選ぶ以外に道はないのだ。

私の前には断るという選択肢は用意されていなかつた。

出された問題の答えを教えてもらつた気がする。親の期待が私にカニニングという行為をさせた。間違えてはいけないプレッシャーの中、答えを知っているのに答えられない自分は時間切れに攻め立てられて、口を開いた。

仲人さんから、「嫁いできてほしい」と言われ、了承した。

断れなかつた。

投げやりな気持ちで、それを選ぶしか無かつた。

ただ、誰かのせいにしないで、自分の意思でそれを選んだ。このことが自分にとって大きな意味を持つ。

でも、自分の意思で選んだと言つても、心の奥では違うと叫んでいる自分がいたりして……。

自分の意思をすべて押し殺して両親の為に結婚することを選んで、これは親孝行になるだろうか？

でも、そういう自分が犠牲になつていてる姿に満足している自分がいるのを感じたりする。

自分はいい子でいたいのだ。自分の幸せは考えてはいない。自己犠牲をしていてる自分の姿に陶酔しているのだ。ただ、結婚相手の幸せなど一切考えてはいない残酷さを持つていてることも自覚している。

それから数日後に会つた時に、「俺と結婚してくれませんか」と曖昧な口調で話されて、うんざりした。

仲人さんから言われているから、今さらという感じがしたし、改めて自分の口で伝えたいという意思があるのなら、もっとはつきりとした口調で言つて欲しかつた。

私は、はつきりと答える気が無かつた。それで、「仲人に結婚を了承した」と彼に伝えた。

家に帰つて、家族の誰とも話す気にならず、すぐに自分の部屋に

行つた。

いちおひ、プロポーズをされたから、結婚が決まって知り合いで報告するべきなんだろうけど、そういう風にはなれなかつた。

ふと、これからのことを考えて頭に浮かんできたのは死にたいつてことだつた。

大切な親友への報告もしなければいけないけれど、おめでとうなんて言われたら、自分が可哀そうで泣けてきそうで出来なかつた。絶望で埋め尽くされた未来の幕開けだつた。

結婚式なんて茶番でしかない。いや、これから結婚生活が茶番になるかもしれない。

何もかもがどうでもいい。自分の人生なんて生きられないのだ。かと言つて、自分ひとりで生きていくかとも不安だ。

居場所が欲しいと彼には言つたけれど、あなたが必要だとは言えなかつた。愛していなくてもいいと言つてくれた彼だけど、愛してくれる人と結婚した方が良いのに。彼も可哀そだ。

自分が結婚式を挙げているところなんて、想像したことは一度もなかつた。

結婚願望なんて持ち合わせていなかつたし、結婚式をする価値を見いだせなかつたからだ。

そんな自分が結婚式に臨むのだ。

高揚感も何もなく、ただ醒めた思いでその時が来るのを待つた。ヴァージンでもないのにヴァージンロードを歩き、愛してもいいのに、愛を誓う。

大嘘つきでごめんなさいと大声で叫びたくなりそうだ。

叶えられなかつた願い。

一度だけでいい、愛している人に愛されてみたかった。
愛される幸せを享受したかった。

儚い願いは、枯れしていく。

私の内を満たすものは絶望だけ。

それでも、私は笑顔で、誓いを交わすだらう。

望みは消え失せ、生きているのか、死んでいるのか……。

終章（後書き）

読後感最悪ですね。自分で書いてて嫌になってきた。

でも、紗柚はああいう風にしか生きられなかつたと思います。いろいろ話のパターンとして、『病院の検査の結果、余命数年バージョン』とか、『遠藤が運命の人バージョン』とか、『藍さんと会つて恋愛に発展バージョン』とか、でもどれも嘘つぽくて紗柚には起らぬことかなと、結局こんな終わり方にするしかありませんでした。

紗柚は幸せなんて望んでいないと言いながら、人一倍渴望していたと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6004m/>

空の器で生きる絶望　からの　うつわで　いきる　ぜつぼう
2010年10月20日14時52分発行